

係助詞「なむ」の機能

——そのとりたての性質と待遇性をめぐって——

森 野 崇

はじめに

平安時代に盛んに用いられた係助詞「なむ」に関しては、既に多くの研究者が検討を加えている。私は、そのような先学の諸論を参考にしながら、この時代の代表的和文資料であり、豊富な用例を有する『源氏物語』を用いて、「なむ」の考察を行った。その結果、この助詞は、その伝達性、そのとりたての性質、その待遇性の三点に特性の見られるものであるという結論に達した。それらをまとめた形で記すと、次のようになる。

「なむ」は確定的なモノ・コトをとりたて、それを聞き手に対して丁寧に、穏やかにもちかける機能を有する。

以下、この機能について説明を加えていくのであるが、「なむ」の有する「伝達性」、つまり聞き手を強く指向する、具体的な聞き手の存在を前提として、その聞き手に向かってもちかけていくとしようとするような性質に関しては、既に拙稿「係助詞『なむ』の伝

達性——『源氏物語』の用例から——」（『国文学研究』九二集昭和六二年）において考察した。従って、本稿では残る二点、即ち「なむ」のとりたての性質並びに「なむ」の待遇性について、述べていくこととしたい。また、考察の過程で右に記した拙論に触れることもあるかと思うが、これについては以下では「前稿」と略称する。

なお、テキストには、前稿同様『日本古典文学大系 源氏物語』（岩波書店、以下「大系本」と略称）を使用し、『源氏物語大成』（中央公論社、以下「大成」と略称）、『日本古典文学全集 源氏物語』（小学館）、『源氏物語』（角川書店〈角川文庫〉）を随時参照した。念のため言い添えれば、大系本の「なむ」は総計一七九五例であり、大成に比較して一〇例程度少ないのであるが、本稿で述べる内容に影響を及ぼすほどの異同はない。

一 「なむ」のとりたての性質

最初に、「なむ」によるとりたての性質について考えていく。前稿においては、私は「なむ」のもつ伝達性にスポットをあてて論じた。「なむ」の、聞き手を指向するという性質は、この助詞を考える上で非常に重要なものである。しかしながら、「なむ」が聞き手めあての機能だけを有し、言表中の各成分や言表の成立には関与しないものだとなると、これは、例えば現代語の「よ」「ね」などといった間投助詞の類と変わらないことになってしまふ。係助詞である「なむ」には、聞き手めあての機能とともに、やはり言表中のモノ・コトをとりたてるといふ機能を認めなくてはならない。それでは、「なむ」はどのようなとりたてを行うのであるうか。

本稿では、次のように「なむ」のとりたてを定義づけたと思ふ。

「なむ」は、表現主体が伝達に際して確信した、確かだと認めた内容の明示を行う。つまり、確定的なモノ・コトをとりたてて示す助詞である。

この定義に結びつきうと思われる現象面の特徴として、『源氏物語』を資料としての調査結果からは、

① 結びにとる助動詞の偏り（主体的表現にあずかる助動詞による結びの例の少なさ）

② 格助詞「と」「へ」の下接例の多さ

③ 接続助詞「ば」に下接した場合の「已然形＋ば＋なむ」の多さ

④ 「なむ」が下接する副詞に見られる偏り

といった四項があげられる。以下、①④の各項に関して、順に説明を加えていく。

まず、①に関して述べる。これについては、「なむ」の結び部分に関して調査した表Aを参照されたい。係助詞の用法を考える際には、その上接語とともに、結びの部分をも検討することが必要である。例えば、山口佳紀は「各活用形の機能」(『国文法講座2 古典解釈と文法——活用語』へ明治書院 昭和六二年)所収)において、次のように述べている。参考にすべき見解であろう。

係結びとは、言うまでもなく、文中の係助詞が文末の用言の活用形を支配する現象である。係助詞の意味は強調とか疑問とか言われるが、その働きは上接の語だけを対象にするものとは思われない。もし上接の語だけを対象にするのであれば、文末にまで影響が及ぶはずはないからである。係助詞が相手にするのは、文の中のかなり大きな要素らしい。(同論文)

こういった観点から、「なむ」の結びの部分を見わたすと、主体的表現にあずかる助動詞による結びが非常に少ないことに気づく。僅か三パーセントほどの低率である。しかも、これは『源氏物語』だけに限ったことではなく、平安時代の他の文学作品においても見出される傾向のようである。(1)

△表A V 「なむ」の結び

	計	%
動 詞	271	15.1
形 容 詞	64	3.6
形 容 動 詞	8	0.4
体 言	7	0.4
流 れ※ア	137	7.6
下略(「なむ」止め)	596	33.2
助 動 詞 (客体的表現)※イ		
ス	4	0.2
ル	5	0.3
ラ ル	12	0.7
マ ホ シ	4	0.2
ツ	39	2.2
ヌ	26	1.4
タ リ	20	1.1
リ	12	0.7
キ	106	5.9
ズ	21	1.2
マ ジ	4	0.2
断 定 ナリ	12	0.7
ヤウ ナリ	1	0.1
助 動 詞 (主体的表現)		
ム	9	0.5
メ リ	34	1.9
伝 聞 ナリ	13	0.7
助 動 詞 (主・客両方)		
ケ リ	295	16.4
ベ シ	95	5.3

※ア 「流れ」とは、

ここにさへなむ、かすめ申すやうありしかど、きびしう諫め給ふ由を見侍りし後、……と人悪う悔いおもう給へてなむ。(行

幸三—75)

のように、連体形終止と呼応していない「なむ」の例を指す。

※イ 客体的表現にあずかる助動詞、主体的表現にあずかる助動詞のグループ分けは、主として北原保雄『日本語助動詞の研究』(大修館書店 昭和五六年)を参考にした。なお、主体的表現にあずかる助動詞には、このほかに「まし」「じ」「けむ」「らむ」「らし」などがあるが、これらは「なむ」の結びの例が皆無であったため、表から外しておいた。

さて、主体的表現ということについて今詳細に検討している余裕はないが、ごく簡単に言ってしまうと、これは表現主体の主観の直接的表現であろう。そして、「む」「らむ」「けむ」「まし」「じ」「めり」「伝聞なり」など、主体的表現にあずかる助動詞は、全て推量の意味をもつものである。「なむ」が主体的表現の助動詞を結びとしくい理由は、おそらくここにあるのだ

う。推量の主体的表現とは、客体界の事象を不確定的に述べたもの、不確かに捉えたものと解しうる。例えば、

花咲きたり。

花咲けり。

といった文は、客体界の事象をそのまま表現したものであり、そこに述べられた事柄は、現実存する、確定的な事象として扱わ

れている。これに対し、

花咲かむ。

花咲きけむ。

といった文の場合、「花咲く」という事柄は、確か・不確かという点から見れば、明らかに不確かなものとして解釈されよう。⁽³⁾このように、対象を不確定的に把握するという側面をもつことが、これらの助動詞が「なむ」と共起しにくい原因ではないだろうか。なぜ「なむ」が主体的表現にあずかる助動詞を結びとしないのかということは、難しい問題であるが、以下に考察を加える②③④の現象などと併せ考えると、やはり確定的なモノ・コトをとりたてるといふこの助動詞の機能ゆえと見るのがよいように思われるのである。

なお、主体的表現にあずかる助動詞には、「む」などのように、表現主体の意志・意向を示す用法を有するものがある。しかし、この場合も、そこに述べられる事柄は実現しておらず、不確かな状態にあると考えられる。従って、推量表現の場合と同様に解釈してよいであろう。客体的表現にあずかる助動詞の内、願望の意を表す「まほし」の結びの例が少ないことも、同じ理由によるものと思われる。また、「まほし」同様客体的表現にあずかる助動詞の方に収まる「まじ」も、否定的推量・否定的意志などを表すために、ここで述べた他の助動詞と同じく、「なむ」の結びに用いられにくいのであろう。

ところで、主体的表現にあずかる助動詞の結びの例が、『源氏

物語』中の「なむ」に全くないわけではない。

「……〔おほろけにはあらじ〕となむ、人々推し量り侍める」

(常夏 三—22) (「」内は心話・以下同)

といった「めり」の例は一・九パーセント、

「かの西の対にすゑ給へる人は、いと、こともなきけはひ見ゆるわたりになむ侍るなる。……」(常夏 三—22)

といった「伝聞なり」の例は〇・七パーセント存する。これらは、右に少し触れた、客体的表現にあずかる助動詞「まほし」「まじ」よりも高率なわけであるが、この現象はどのように考えたらよいだろうか。

実は、この「めり」「伝聞なり」は、「つ」や「き」に上接するなど、主体的表現にあずかる助動詞の中でも、やや異質なものである。北原保雄は、この点について次のように述べている。

大局的には、「なり」(推定・伝聞)「めり」も「む」「らむ」「けむ」「らし」「じ」などと同類の助動詞であるとみなしてよいであろうが、「つ」や「き」に上接するということは、

「音が聞える」「目に見える」というような客体的なところが残っているからか、あるいはそのような起源的な事情が形態的に残存しているからであると解釈せざるをえないであろう。「なり」(推定・伝聞)や「めり」には、現代語の「らしい」のように客体的側に即した表現と主体の側に即した表現(推量表現)との二面にゆれるところがあるのかもしれない。

更に、やはり北原が指摘しているが、「めり」「伝聞なり」は接続助詞「ば」を下接させる。これも、「む」「らむ」「けむ」等には見られない用法である。

このような点から、「めり」や「伝聞なり」は、主体的表現にあずかる助動詞の中でも少々特殊な存在であり、むしろ事態を客体的に述べる側面も有していると思われる。つまり、「……」のように見える状態にある」「……のように聞こえる状態にある」といった、他の推量の表現に比べて確定的な意味合を含むのであって、そこに、「なむ」が「めり」や「伝聞なり」を比較的多く結びにとる理由があると解釈されるのである。逆に見れば、主体的表現にあずかる助動詞の内、「めり」や「伝聞なり」に限って「なむ」の結びに用いられやすいという事実は、この二つの助動詞が、やはり「む」「らむ」などとやや異なる性質のものであることを示す傍証の一つとなる。

なお、『源氏物語』では、「伝聞なり」による結びに続くものとして、「む」による結びが九例存するが、この中には問題のある例が少なくない。例えば、

「……まづ、おとゞにかくなん聞えむ」(玉鬘 二一347)

の場合、大成では「なん」の後に「と」が入っており、そちらに従えば『かくなん』と聞えむ」と解釈されて、「なむ——む」の例からは外れてくる。また、

「……あまたの中に、「これをなむ命にも換へむ」と思ひ侍

り。……」(東屋 五一139)

という例も、大成によれば「思ひ侍り」の部分が「思ひ侍る」となっていて、その場合は「命にも換へむ」だけが、「」で括られる心中思惟の内容になる。結局、「なむ——思ひ侍る」という呼応と捉えられるわけである。このように一例ずつ吟味していくと、最終的には「なむ——む」の例は半数程度に減少しそうである。藤袴巻(三一110)、竹河巻(四一280)、総角巻(四一461)、東屋巻(五一133)、の各例である。但し、藤袴巻の例は大系本の本文自体に脱字の存する箇所であり、青表紙本系の池田本では「なむ」は補入である。他の三例も、別本系あるいは河内本系では本文に異同の存するものばかりであって、どれも「なむ——む」の確実な用例とするには不安が残る。

以上、①をめぐって考察を行ってきたが、最後に主体的表現・客体的表現のどちらにもあずかる助動詞による結びに関して、少し触れておく。ここに収まる助動詞の内、「けり」の場合は、詠嘆よりも、過去の事柄だということを示す、いわゆる非体験回想の例が中心と解釈される。従って、確定的なモノ・コトをとりたて「なむ」の結びに用いられても、おかしくはない。「べし」の場合も、この助動詞の表す推量が必然性の強いものであることを考えれば、「なむ」との共起は決して不自然ではないだろう。

次に、②の「格助詞」と「下接例の多さ」について考えることにする。表Bに示したように、八・六パーセントという数値は「なむ」に上接する格助詞中最も高いものであり、また他の係助

△表B V 「なむ」の上接語

	計	%		計	%
体 言			係 助 詞		
非格体言※ア	11	0.6	モ	1	0.1
主格体言	275	15.3	動 詞		
ニ格体言	8	0.4	動 詞・用	8	0.4
ヲ格体言	15	0.8	複合動詞介入	1	0.1
時の体言	46	2.6	形 容 詞		
その他の体言※イ	1	0.1	形容詞・用	58	3.2
格 助 詞			クアリ介入	141	7.9
ニ	141	7.9	形 容 動 詞		
ヲ	94	5.2	形容動詞・用	27	1.5
ト	154	8.6	ニアリ介入	21	1.2
ヨ リ	4	0.2	助 動 詞		
カ ラ	2	0.1	断 定 ナ リ (全てニア リ介入)	147	8.2
ニ テ	14	0.8	ヤウナリ・用	6	0.3
シ テ	1	0.1	ヤウニアリ介入	5	0.3
ト テ	22	1.2	ズ ・ 用	14	0.8
接 続 助 詞			ズアリ介入	28	1.6
テ	244	13.6	ベ シ・用	12	0.7
バ	27	1.5	ベクアリ介入	14	0.8
デ	17	0.9	マ ジ・用	7	0.4
ツ ツ	7	0.4	マジクアリ介入	10	0.6
ナ ガ ラ	1	0.1	マホシ・用	3	0.2
副 助 詞			マホシクアリ介入	2	0.1
サ ヘ	9	0.5	ゴトシ・用	1	0.1
ノ ミ	42	2.3	ゴトクアリ介入	0	0
バ カ リ	6	0.3	副 詞		
ナ ド	5	0.3	体言の副詞の用法※ウ	118	6.6
マ デ	14	0.8	接 続 詞		
シ モ	5	0.3		4	0.2
				2	0.1

※ア

「非格体言」とは、

よその思えなん、へつらひて、人言ひなすべき。(東屋 五—136)

のように、「なむ」が下接している体言と述部との間に論理的格関係が認められないようなものである。

※イ 「その他の体言」の一例は、

及第の人、わづかに三人なんありける。(乙女 二—320)

のように、断定の助動詞「なり」の連用形「に」で示されるような関係のところに、「なむ」が用いられているものである。

※ウ 「体言の副詞的用法」という欄は、「女二人なむ」「たゞ一言なむ」などのように、副詞ではないものの、副詞的に連用修飾成分として使用されており、表中の他の箇所には収まりにくい語に下接した「なむ」の例を一括したものである。

詞と比較した場合も、やはり高率である。⁽⁵⁾そこで用例をよく観察すると、

「……[しか思ふべきつみもなし]となん思ひ侍る」(真木 柱 三—141)

「……小さき舟に乗りて、西のかたをさして漕ぎゆくとなん見侍りし。……」(若葉上 三—285)

「この春初瀬に詣で、怪しくて見出でたる人となむ聞き侍りし」(手習 五—367)

などのように、「……と思ふ」「……と見る」「……と聞く」といった、上の内容を引用の形で示す「と」に「なむ」が下接したものが、特に多いようである。この「と」は、いわば上の内容を括弧で、既に成立した言表として示すものと思われる。そこに、表現主体が確かだと認めた内容の明示を行う「なむ」との接点が見出せるのではあるまいか。なお、大野晋は「……となむ」「なむ」は「なむ」の古形」という、宣命に多く見られる形に注目し、次のように述べている。

これらのこと(森野注Ⅱ「……となむ思ふ」等の多さ)を

考え合わせると、ナモという助詞は相手に向って談話する際に、「……と思ふ。……と聞く。……と見る。」と話手の広い

意味の知覚の内容を確認し表明するに使うのが中心をなすという結論に達する。言ってみれば、話手の思考・聴覚・視覚のはたらきの結果を相手に向って強く示すのである。(『日本語の構文——係助詞の役割——』『文学』五二卷一二号 昭和五九年)

本稿の分析に通じる論と思われる。

続いて③の説明に移る。表Bに示した通り、接続助詞「ば」に下接した「なむ」は二七例存するが、その内「未然形+ば+なむ」の例は僅か六例に過ぎず、二二例が「已然形+ば+なむ」の形である。約八割が「已然形+ば+なむ」ということになる。二、三例をあげておこう。

「……これは、たゞ目なれぬさまなればなん」(紅葉賀 一—281)

「……宮の、いとも心苦しう思いたりしかばなむ。……」(野分 三—60)

「所違へのやうに見え侍ればなん。……」(浮舟 五—258)

因みに、『竹取物語』では「已然形＋ば＋なむ」が二例、「未然形＋ば＋なむ」は見られない。『伊勢物語』や『蜻蛉日記』の場合もほぼ同様で、どちらも「已然形＋ば＋なむ」が一例、「未然形＋ば＋なむ」はゼロである。これらの作品にはそもそも「ば＋なむ」の形が少ないため、はっきりしたことは言いにくいだが、比較的「ば＋なむ」が目立つ『落窪物語』においても、一一例全て「已然形＋ば＋なむ」なのである。これに對し、同じく「ば」に下接する例がごく普通に見出せる「こそ」の場合には、こういった傾向は見られない。『源氏物語』では、「未然形＋ば＋こそ」が二八例、「已然形＋ば＋こそ」が一七例であり、むしろ「未然形＋ば」に下接したものの方が多い。『落窪物語』においても、「未然形＋ば＋こそ」が一八例存するのに對して、「已然形＋ば＋こそ」は僅か二例に過ぎない。この事実から、「已然形＋ば＋なむ」の多さには、やはり「なむ」のとりたての性質が関係していると考えられる。已然形の主要な用法は、「は」や「ど」「ども」を下接させて確定条件を表すというものであろう。今問題としている「已然形＋ば」は、順接の確定条件を表す。確定的なモノ・コトをとりたてる「なむ」が、未然形よりも已然形と結びつきやすいのは、当然のことと言えよう。

最後に、④の『なむ』が下接する副詞に見られる偏りについて述べる。「ぞ」や「こそ」に比べ、「なむ」は「かく」や「さ」といった副詞につくことが多い。『源氏物語』において、「なむ」

が下接した副詞を見ると、「かく」が三七例で三一パーセント程度、「さ」が二四例で二〇パーセント程度と、この二語で副詞下接例の半数以上に達する。⁽⁷⁾その他にも、「し」かじか」や「しか」など、指示詞的な語が目立つ。この結果には、会話を簡略に表す際に、単に「『かく』と……」「『さ』と……」などとせず、「『かくなむ』と……」「『さなむ』と……」として会話であることを明示するという、前稿で触れた表現形式の存在も影響しているように、右に述べてきた「なむ」のとりたての性質も関わっているのではないだろうか。つまり、「かく」や「さ」は既に確たるものとして存する事象を提示する語であり、その点が、これらの語に「なむ」が下接することが多い一因となっているのではないかと推測されるのである。

以上、「なむ」のとりたての性質について、分析を行ってきた。ここでとりあげた傍証の中には、更に考察を重ねていくべきものもあるが、「なむ」がどのようなモノ・コトをとりたてるかという問題については、およそ明らかになったと思う。ほかにも、動詞を結びとした例の多さや、接続助詞「て」に下接した例の多さなど、「なむ」の機能に結びつくと考えられる現象はいくつかあるが、これらについては、今しばらく検討を加えることとした。い。

二 「なむ」の待遇性

さて、冒頭にあげた前稿において、私は「なむ」の伝達性に関

する考察を行ったが、このように伝達性に重点のおかれる語には、それが本義ではなくとも、対聞き手意識から、ある種の待遇性が生じてくる可能性がある。つまり、現代語の「よ」「さ」「ね」等のように、本来待遇的な価値を有する語ではなく、いわゆる敬語とは言えないものの、待遇表現に関係してくるといったことが、「なむ」にも考えられるわけである。

「なむ」の待遇性について、最も強く述べたのは大野晋である。大野は「なむ」を、「侍り」と同じ役割をもち、「侍り」以前に丁寧な指定を表していた語と推定した。⁽⁸⁾「なむ」を「侍り」相当の語と見ることは異論もあり、また大野自身、近年この考えを改めているが、⁽⁹⁾「なむ」に穏やかにもちかけるような感じがあるという見方は、多くの研究者が行っている。ただ、もう一歩進めて、丁寧な指定を表すと解釈し、待遇表現にあずかる語の体系の中にこの助詞を位置づけるといったことは、なされてはいないようである。

ここで、夕顔巻における「なむ」について、少々考えてみることにしよう。源氏を中心とした男性同士の会話に的を絞ると、「なむ」の使用は、

源氏↓惟光⇄四例、源氏↓頭中将⇄二例、隨身↓源氏⇄二例、
惟光↓源氏⇄一五例、院の預りの子↓源氏⇄一例、宿守↓源氏⇄一例

である。身分関係が下位の者が源氏に対して用いている例が多く、特に惟光↓源氏の発言中に一五例も見られることが注目される。

だからといって、上位者から下位者に対しては使われないというわけでもなく、源氏↓惟光にも四例用いられている。『源氏物語』全体を見わたしても同様であり、結局のところ、「なむ」には身分関係による厳密な使い分けといったことはないようである。従って、「なむ」が伝達に際して丁寧さを添えるものだととしても、例えば源氏から惟光に対しては用いられることのない「侍り」等と同一のグループに収めることは、無理であろう。ただ、丁寧さややわらかさを示す傾向は指摘できるし、一つ一つの「なむ」の使用場面・使用者の感情等を吟味していくことで、それはより明確になってくる。

夕顔巻の源氏↓惟光の場合と惟光↓源氏の場合も、実は使用状況が少々異なっている。惟光↓源氏の一五例の「なむ」は、いずれも二人とも落ち着いた、いわば平生の会話の中で使用されているものである。次に一場面を示す。

惟光、日頃ありてまゐれり。「わづらひ侍る人、猶よわげに侍れば、とかく見給へあつかひてなん」など聞えて、近く参り寄りてきこゆ。「仰せられし後なん、隣の事知りて侍る者呼びて、問はせ侍りしかど、はか／＼しくも申し侍らず、……となん申す。時／＼、中垣の垣間見し侍るに、げに若き女どもの透影見え侍り。褶だつもの、かごとばかり引きかけて、かしづく人侍るなめり。昨日、夕日のなごりなくさし入りて侍りしに、文書くとして居て侍りし人の顔こそ、いとよく侍しか。物思へるけはひして、ある人々も忍びてうち泣くさまな

どなん、著く見え侍る」(夕顔 一—129)

これは、源氏に女(夕顔)の調査を依頼された惟光が、その中間報告を行っている場面であるが、四例の「なむ」が見出せる。惟光↓源氏の「なむ」は、殆どがこのようなごく普通の状況下で、謙譲語や丁寧語とともに使用されており、いずれも、源氏に対する惟光の発言を、やわらかで丁寧なものにする効果を有していると解される。

一方、源氏↓惟光の四例は、みなかなり特殊な状況下での使用である。第一の例は、夕顔の急死によって呼び出された惟光に対して源氏が、

「こゝに、いと怪しき事のあるを。あさましといふにも、あまりでなんある。……」(夕顔 一—152)

と言うものである。直前に、「やゝためらひて」と、源氏の心理状態が述べられている。少し落ち着きを取りもどした源氏の心中には、惟光の尽力によって親密になることのできた夕顔を廃院に誘い、あげくの果てに死なせてしまったというある種の負い目の意識や、夕顔頓死という事態の中で、源氏にとって頼りになる人物は惟光以外にないことからくる、すがりつくような思いがある。このような、普段惟光と接しているときは全く別の状況が、源氏の「なむ」使用に微妙に作用しているのではあるまいか。他の三例も、みな夕顔急死事件以降の源氏↓惟光の発言中に見られるものであり、やはりここに述べたような意識が源氏にはあったと見てよい。なお、惟光↓源氏の発言中の「なむ」の使用

状況は、夕顔急死事件以前・以後で、特に変わらないようである。

右に見てきたような「なむ」の使用から、「なむ」には伝達に際して、それが事務的な、やや冷たい感じの発言となるのを防ぎ、円滑に伝達内容を伝えるような丁寧さ・穏やかさといったものが存することが、理解されたと思う。ほかにも、宿木巻において、中君に密かな思いを寄せる非常にまじめな人物の薫と、中君を妻とし、プレイボーイ的性格を有する匂宮の、それぞれの中君への発言中に見られる「なむ」を調査すると、

薫↓中君 一八例、匂宮↓中君 一例

のようになる点など、「なむ」の特性をよく示す現象であろう。各々の発言の一部を次に引いておく。

〈薫↓中君〉の例

「……心の安き男だに、いと、行き来程、荒ましき山道に侍れば、思ひつゝなむ、月日も隔たり侍る。故宮の御忌日は、かの阿闍梨に、さるべき事ども皆言ひおき侍りにき。かしこは猶尊き方に思し譲りてよ。時／＼見給ふるにつけては、心惑ひの絶えせぬもあいなきに、……となむ思ひ侍るを、又いかど思し掟つらむ。〔ともかくも定めさせ給はむに従ひてこそは〕とてなむ。……」(宿木 五—52)

〈匂宮↓中君〉の例

「……むげに世のことわりを思し知らぬこそ、らうたき物から、わりなけれ。よし、我が身になしても思ひ廻らし給へ。」

＜表C＞ 「ぞ」「なむ」「こそ」と「侍り」
「給ふ」(下二段)との共起

	ぞ	なむ	こそ
会話・消息中の 使用例	152	1,490	1,221
「侍り」との共 起例	24 (15.8%)	432 (29.0%)	231 (18.9%)
「給ふ」(下二段) との共起例	1 (0.7%)	155 (10.4%)	35 (2.9%)

身を心ともせぬ有様なりかし。もし思ふやうなる世もあらば、人に勝りける心ざしの程も、しらせたてまつるべき一節なむある。たは易く言ひ出づべき事にもあらねば、今のみこそ」
(宿木 五―61)

認めない。ただ、

月日の影は、御心もて、はれ／＼しくもて出でさせ給はゞこそ、罪も侍らめ。(椎本 四―361)

のように、接続助詞に係助詞が下接した形で下の主句に「侍り」「給ふ」があるときは、一と数える。また、係助詞一に對して同一文中に「侍り」あるいは「給ふ」が二つ以上あつても、一と計算する。

※単文単位で文を切り、その中に各係助詞と「侍り」「給ふ」(下二段)が併存したときに一と数える。左のような場合である。侍従が伯母の、少將といひ侍りし老人なん、変らぬ声にて侍りつる。(蓬生 二―154)従つて「ば」や「ど」による条件句の構文などで、主句と条件句とに係助詞と「侍り」「給ふ」が別々に存した場合は、共起と

更に、この性質は、「なむ」が「侍り」や下二段活用の「給ふ」と共用されることが多いという事実によって、裏づけられる。先に長く引いた惟光―源氏の発言や、右に引用した薫―中君の発言においても「侍り」「給ふ」が用いられているが、この点に関しては、一文単位の調査の結果を示した表Cが参考にならう。「侍り」との共起率二九パーセント、「給ふ」との共起率一〇・四パーセントという、いずれも「ぞ」「こそ」の場合を大きく上回る数値には、「なむ」のやわらかさ・丁寧さといったものが表れていると認められるのである。

以上述べてきたように、「なむ」は丁寧なもちかけを行う語であり、待遇的に無色の助詞ではないわけであるが、その待遇性はいわゆる敬語に含まれるほどのものではない。だが、待遇表現にあずかる語の体系から、全く外してしまうのも問題であろう。結局、「侍り」や下二段活用の「給ふ」よりも軽く、これらの語とともに用いられる際には、これらの語を側面からサポートする形で、会話がより丁寧かつ穏やかなものになるようににはたらく助詞なのだと思う。『源氏物語』において、例えば明石巻の明石入道―源氏や、橋姫巻・宿木巻の弁御許(弁尼)―薫のように、年老いた人物が高貴な人物に接するとき、「なむ」と「侍り」あるいは「給ふ」(下二段)が半ば規則的に共用されているのも、老人ゆえの非常に丁寧な言い回しを表現したもののではないだろうか。

最後に、「なむ」の下略の例、つまり「なむ」止めの例に関し

て、伊牟田経久は「押しつけを避け、余情をこめる表現」と解釈しているが、これも「なむ」の丁寧さ・やわらかさに結びつくものと考えられることを、付言しておく。

おわりに

以上、係助詞「なむ」について、そのとりたての性質、その待遇性の二点の考察を行ってきた。これに、前稿において述べた伝達性という特性を加えて、「なむ」の機能をまとめると、本稿冒頭に掲げたようなものになる。ここにもう一度記しておく。

「なむ」は確定的なモノ・コトをとりたて、それを聞き手に対して丁寧に、穏やかにもちかける機能を有する。

「なむ」の場合、他の係助詞との大きな相違点であるという意味でも、やはりその伝達性を重視すべきであろう。しかし、この助詞の機能は、聞き手へのもちかけという点だけにあるのではない。本稿において考察した、とりたての特性や待遇性も、「なむ」を考える際に見落としてはならないものである。

(1) 永井汎「係助詞『ぞ』『なむ』『こそ』の本質意義に就いて」(『国文学攷』四巻一輯 昭和十三年)、宮坂和江「係結の表現価値——物語文章論より見たる——」(『国語と国文学』二九巻二号 昭和二十七年)などを始めとして、多くの論考にこの傾向は指摘されている。

(2) なお、橋本進吉は「助詞・助動詞の研究」(岩波書店 昭和四四年)の中で、助動詞を意味によって分類するに際し、最初に確定と不確定とに分けるということを行っている。これは山田孝雄や安田喜代門の論を修正したものであ

るが、不確定の方には「む」「らむ」「けむ」等が収まるなど、本稿の分析とほぼ同様の結果となっており、参考になる。詳しくは同書二五七ページ前後を参照されたい。

(3) なお、「まほし」同様客体的表現にあずかる助動詞で、願望の意を表すものに「たし」があるが、これは平安時代末期頃から用いられはじめる語であり、『源氏物語』中には用例が見られない。

(4) 本文の引用は大系本を用いたが、振り仮名や読点等は私意によることがある。また、(一)内に大系本の巻数とページ数を示しておく。

(5) 他の係助詞の、「と」に下接した用例の比率を示すと、例えば「ぞ」は七・三パーセント、「こそ」は四・三パーセントである。

(6) 『竹取物語』については大系本で調査した。また、『伊勢物語』は『伊勢物語に就きての研究』(校本篇 有精堂 昭和三十三年、補遺篇・索引篇・図録篇 有精堂 昭和三十六年)を、『蜻蛉日記』は『かげろふ日記総索引』(風間書房 昭和三十八年)を、それぞれ使用した。『落窪物語』は『落窪物語総索引』(明治書院 昭和四二年)を用いて、大系本で調査した。

(7) 因みに、「ぞ」の場合、「かく」「さ」に下接した例は副詞下接例の内の二七パーセント程度である。「こそ」の場合は、三六パーセントが「かく」「さ」に下接しているが、「なむ」に比べるとかなり少ない。

(8) 『岩波古語辞典』(岩波書店 昭和四九年)、「古典語の助動詞と助詞」(『時代別・作品別 解釈文法』(至文堂 昭和五八年)所収)など。

(9) 大野晋「日本語の構文——係助詞の役割」(『文学』五三巻五号 昭和六〇年)。

(10) 伊牟田経久「ナムの係り結び」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』(表現社 昭和五一年)所収)。